

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

2006.9.25 発行

No.58



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.58 目次

ハクビシンとタヌキの受難	2 - 4
新理事自己紹介	5
学会発表・学術集会のご案内	6
ツバメのタマゴやヒナが消えてしまうわけ	7
油汚染水鳥救護指導者講習会の開催	8 9
事務局日誌	10

ハクビシンとタヌキの受難

WRV 理事 石橋 徹

最近、私が開業している吉祥寺でタヌキとハクビシンが増殖しています。吉祥寺といえば若者の街として有名なハイカラなエリアですが、東京都恩賜井の頭公園を中心として三鷹エリアに広がる農家の屋敷林、地主提供の雑木林の公園、玉川上水の緑地など、まずまずの自然環境が確保されています。これらの緑地を拠点に、ハクビシンとタヌキが生息し、ここ数年、急速に個体数を増加させている様子で、目撃談や果樹などの被害が増えています。この傾向はおそらく東京の多摩地区全域にあてはまることと思われ、母校麻布大学の裏山である小山田地区でもハクビシンとタヌキは沢山みられ、私の住まいがある調布市でも同様です。八王子駅前の飲み屋街をゆうゆうと横断して壁をよじのぼりビルの谷間に消えていったハクビシンを目撃したこともあります。

吉祥寺のタヌキ・ハクビシンは庭木の果実（カキなど）、庭池の魚、野良猫おばさんが撒く猫缶、生ゴミ、庭の犬小屋での犬の食べ残し、公園の花見あとの投棄ゴミなどを食料にしている様子です。ただし、目撃者である住民の同定能力の不確かさから、どちらが何を食べているのかは判然としていません。（すくなくとも柿の木に登って実を食べたのはハクビシンかと思われます。）

これらの動物が地域住民とどのような関係にあるのか、当院の患者の中から声を集めてみた結果、以下のような傾向がみられました。

- ・ 野生動物が庭にきて 嬉しい。
- ・ 珍しいものを見た目撃談は、話のネタとして自慢である。
- ・ 猫おばさんの憎い『袈裟』のひとつとしてアンチ野良猫住民が注目している。
- ・ 大切にしている金魚を捕食され 悲しい。
- ・ 庭木の果実を横取りされて 腹がたつ。
- ・ 庭木の果実をわけてあげる喜びを感じる。
- ・ 犬に病気を感染させはしまい不安である。
- ・ 人に病気を感染させはしまい不安である（とくにサーズ問題が顕著）。
- ・ 糞尿の被害があった。

などなどです。総じて、不快害獣のイメージは薄く、あまり深く考えずに、野生動物が身近にいることが豊かな生活であると感じている方が多いようで、なんらかの食害にあった人も、徹底抗戦の構えは感じられませんでした。アンチハクビシン・タヌキの人の意見では、やはり感染症の問題が最大の関心事のようで、中には少数ながら積極的な駆除を希望する声もきかれました。

以上のような背景の中、先日、民家におけるタヌキの被害で珍しいものがあったので報告します。

4月のとある暑い日。

『タヌキが、アパートの屋根裏に住み着き、電線を断線させてしまい、漏電を危惧する住民が半ノイローゼになり、大家さんも火事の不安で夜も眠れず（本人たち談そのまま）とうとう住民はアパートを出てしまった。なんとかしてほしい。』との相談が患者宅から舞い込みました。

庭にガマガエルが出た。台所にネズミが出た。ゴキブリを退治するにはどうしたらいいか。昆虫採集の道具はどこに売っている？いまの彼氏とは別れたほうがいいのかしら？

患者さんって いろんな相談してきますよね。

走者一掃の大暴投な質問に毎度のことと苦笑しつつも、相談をうけた私は、『火事の危険・家屋の破損が現実起こっている以上、有害鳥獣駆除申請をして、駆除を依頼したらどうか』とアドバイスをし、環境省と東京都の窓口を紹介しました。

ところが、有害鳥獣駆除は本来農業被害に対するものであって、この場合には適用しない。またこのような問題において東京都は直接動く筋合いではないので、入り口をふさぎ、バルサンを炊くなどして各自でタヌキを追い出す努力をしてください。とのあっさりとした電話対応だけで終わってしまったとのこと（都庁の各部署に、『ひと肌脱ぐ』と書いた掛け軸をプレゼントしようかと思います）。

大家さんは心細い老婦人であったため、半泣きでこんどは警察に相談したところ、警察官がバルサンを炊いてくれたそうです。どこが入り口なのかわからないまま『それらしき場所』を大工さんに塞いでもらい、バルサンをたいて『とりあえずその場からは追い出した』状況で、いまだ不安が拭い切れない大家さんがやはり直接捕獲してほしいと再び私に依頼してきました。

カミさんとスタッフの白くて生暖かい視線に見送られ、患者でござったがえす病院をぬけて現場に行ってみると、当然、屋根裏にタヌキの姿はありません。もちろん、いなくなったとも、今後、戻ってこないとも断言できません。捕獲希望で人を呼ぶなら現状維持の状態で呼んでくれないと意味がないのですが、当事者は混乱するがままに行き当たりばったりで右往左往している様子。とりあえず無駄足からいったん病院にもどったところ、翌日、タヌキが屋根裏にもどったので捕獲してほしいとの再度の依頼が。

タモと麻酔薬を用意して、狩猟免許をもたない自分が許可なしに捕獲してよいものか思案しつつ現場に急行し、捕獲を試みました。天井裏は狭くてタモが取り回せないため、捕虫網を改造したヌーズをその場でつくって首をくくりにしました。ところが 後一步のところ で タヌキは肛門腺を噴射しながら壁のスキマに落下！

外壁・柱・風呂の壁という3層構造の中で、柱の太さだけのスキマにタヌキはハマっているわけですが、自力で2mをよじ登れない限り餓死してしまいますし、自力でよじ登られれば逃げてしまいます。天井スペースが狭いため上からタヌキを釣り出すような道具は中に入りません。よって、天井部分を大工さんが板でふさぎ、脱走ルート無くし、外壁のサイディングを破壊して中のタヌキを出すことになりました。その夜は大学の病理に検体を搬入する予定であったため現場から離れることになり、その後の様子はあとから聞くことになりました。



私が去ったあと、外壁に穴がつけられたのですが、なぜかタヌキはその場に居座り、威嚇して人をよせつけないまま穴から出てこず。タヌキを捕獲することも追い出すこともできず、最終的には漏電・火災のキーワードで消防署が出動し、まさにカチカチ山状態。さらに消防署からの依頼で特殊な網をもった警察官も出動し、タヌキは無事捕獲されたそうです。

あとで調べたところ、ハクビシンについては捕獲業者がいて、捕獲許可の申請までぜんぶやってくれるとのこと、今後、今回のような依頼があった場合には、まず民間の業者を頼るべきであることを学びました（やはり直接お金を渡す相手のほうが良く動いてくれますね）。同時に、自分自身でも狩猟免許を取得しておこうかと思っています。

いずれにしても従来言われていた糞害よりもはるかに危険性の高い、火災という被害が示唆される例でしたので紹介してみました。誰かが焼死するようなことがあると東京都でも対応マニュアルができるのではないかと思います。とりあえずは民間業者のリストを市の担当部署にでも配布しようかと準備中です。

タヌキ騒動から2ヶ月ほどして、こんどはハクビシンが多摩環境事務所の依頼で持ち込まれました。捕獲したのは調布市の職員で、最初の住民の話では『カラスにつつかれて弱っている仔ダヌキ』とのことでした。

実際にやってきたのは、交通事故と思われる外傷で瀕死のハクビシン。しかも成獣でした。

調布市のトラックの荷台に、酒屋さんにあるようなプラスチックのコンテナ（メッシュ状の）がおかれ、その中にハクビシンが入れられて 上からタモ網がかぶせられていました。健康な犬でも熱中症になるうかという気候の中、炎天下の荷台にゆられてきたハクビシンが不憫でありました。瀕死の動物を確実に救命しようという姿勢でもなく、仮に、もうすこし元気だった場合には容易に逃げられる輸送方法でもあり、そもそも種類の同定も間違っており、カラスにつつかれた傷と、以下に述べるような重い外傷の区別もつかず。



はじめてのおつかいか、留守番の年寄りか？という状況に唖然としました。それでも最終的に指定病院まで連絡がつながり、患者がはこばれたというのは、以前にくらべたら格段の進歩なのだと言環境事務所の方から聞かされました。これまでの環境事務所の方の地道なご苦労があった様子。官民協力して、ここから更なる進歩をなしとげたいものだと思います。

さて。ハクビシンの外傷は重症で、右の側頭部の皮膚が耳から目までそっくり剥げ落ち、『シュワちゃん部分が半分剥げ落ちたターミネーター』のような顔になっています。また、両足が飛節のあたりで喪失していました。時間もそれなりに経過しているらしく、ぶら下がっている足先からは腐敗臭がし、ハエが産卵しています。患部は乾燥してミイラ状になっていました。

呼吸はしており意識もかろうじてある様子ですが、損傷が激しく、仮に傷を治癒させたとて野生復帰の見込みがないことから、残念ながら、そのまま安楽死することにしました。

余談ですが、輸入商の顧問当時、ずいぶん沢山のハクビシンとタヌキが中国からペット用に輸入されていたのをみました。ちょっとした犬の一品種なみの個体数は輸入されていたと思います。これらは外見上国産のタヌキ・ハクビシンとかわりなく、ベビーサイズで販売されていましたが、成長して飼育者の手にあまるのは目に見えている商材の典型だったと思います。当時販売されていた個体の逸走や遺棄によって、在来のタヌキ・ハクビシンに遺伝子の汚染問題はおきていないのか 気がかりでなりません。また、中国から輸入されたペット用のハクビシンに噛まれて肺炎になったという人物もあり、しかもそれがサーズ発見以前の出来事なので大変興味があります。機会があったら真相を掘り下げてみたいと思っています（ペットトラブル110番という行政書士のブログで12月16日付のスレッドの一連の流れの中でみられた発言です。昨年、厚生労働省にも一報いれておきましたがその後のことはわかりません）。今回、はからずもハクビシンの遺体を手にしたわけですが、上記のような関連から、分類学的な立場からDNAの比較研究をしている人、あるいはズーノシスの研究をしている人がいたら せめて血液サンプルでも提供したかったと悔やまれます。

話をもどします。

今回の遺体は、調布市にそのまま引き取ってもらいました。

これ以上病院ですることは何もないのでこのままお引取りください。と伝えると、調布市職員は、『え？ うちが処分するのですか？』と驚いた様子。

私も『じゃあ、動物病院が埋葬を負担するのですか？清掃事務所直結の市役所のほうが適任ではないのでしょうか？』と驚きましたが、タヌキといいハクビシンといい、たかだか5kgに満たない野生動物の処遇も決められない社会のしくみに一番びっくりしました。

新理事 自己紹介

WRVのみなさま はじめまして。東京都三鷹市開業の石橋徹（いしばし とおる）と申します。昨年度に行われました、環境省のマイクロチップ技術講習会検討委員会席上にて WRV 会長の須田先生と御縁ができ、爬虫類よろず担当者として理事を仰せつかりました。以下略歴をもって自己紹介とさせていただきます。いささか門外漢であることが否めませんが微力ながらお役にたてるように努力いたしますので、よろしく願いいたします。

昭和39年12月23日 生

出身：東京都武蔵野市

平成6年3月 麻布大学大学院獣医研究科獣医学専攻 博士課程 修了（獣医学博士取得）

平成6～10年 都内動物病院勤務

都内動物輸入商顧問

都内動物看護専門学校講師

麻布大学附属動物病院 循環器科在籍

平成11年 フロリダ大学附属動物病院 動物園野生動物科 研修

平成12年 いのかしら公園動物病院 開業

爬虫類の臨床と病理のための研究会 理事

爬虫両生類情報交換会 副会長（2005年まで）

野生動物医学会会員・野生動物救護獣医師会会員・日本獣医循環器学会会員

A R A V（ASSOCIATION OF REPTILES AND AMPHIBIAN VETERINARIAN）会員

東京都指定野生鳥獣保護病院

環境省・動物保護管理協会合同『愛玩動物適正飼養管理マニュアル』作成委員

環境省・動物保護管理協会合同『動物販売者説明マニュアル』作成委員

環境省『特定外来生物法』特定外来生物等分類群専門家グループ爬虫類委員

National Reptile Breeder's Expo2000 スタッフ

我が家の動物マガジン 月刊アニファ監修（平成17まで）

みなさん、はじめまして。この4月から、新理事になりました安田 剛士（やすだ つよし）です。私は、群馬県の沼田市というところで動物病院を開業しています。出身大学は日本獣医生命科学大学(旧称：日本獣医畜産大学)です。卒業後数年間須田会長の病院にお世話になりました。

沼田市で開業して12年になりますが、その間地元の自然環境の保全活動に関わってきました。この活動が猛禽類を指標として自然環境を科学的に評価するものでしたので、いつの間にか私のことを猛禽類に詳しい獣医師と勘違いする人が増えてしまい今日に至っています。その様な経緯からか、群馬県獣医師会では野生動物の担当になっています。

特別、野生動物（特に猛禽類）の獣医学や生態学に詳しいわけではないのですが、我々人間と野生動物の間に生じる問題に対処するには自然科学的アプローチはもちろん社会科学的な手法も含め様々な視野や価値観あるいは法規が必要であることをひしひしと感じてまいりました。

その様な一分野として野生動物の救護があるわけですが、私の理想は、当たり前ですが、救護ゼロ、の環境です。救護された野生動物たちから何を学びどのように自然環境と人間社会に還元していくか、と言うことが自分に問われているのだと思っています。

会長はじめ先輩役員の方々と会員の皆様のご指導の下活動していきますので、今後よろしくお願いたします。

【プロフィール】

1964年1月25日生まれ

1988年3月 日本獣医畜産大学大学院修士課程卒

1988年4月 須田動物病院勤務

～

1992年7月

1994年7月 沼田市にてアミ動物病院開院

学会発表・学術大会のご案内

日本野生動物医学会 岐阜大学、9月25日(月)～28日(木)

「対馬近海において重油に汚染された水鳥の病理学的研究と今後の課題」

発表者：齋田、梶ヶ谷

日本小動物獣医学会 東京大学、10月15日(日)

「野生動物救護診療集計報告 2005」

発表者：大窪、中川、野村、森田、馬場、新妻、植松、小松、須田

第27回動物臨床医学年次大会 グランキューブ大阪、11月18,19日(土、日)

「羽毛内ミネラルの分析」

発表者：新妻、野村、安田、中津、須田

「野鳥の診療カルテ集計 その1」

発表者：須田、磯、新井、池谷、大窪、野村、中津、網本

11月19日(日)9:00～11:15にはWRVが共催で、市民公開講座(無料)が開催されます。

野生動物フォーラム 「外来種(特定外来生物)アライグマ、野生化への対応」

講師：池田透先生(北海道大学)

シンポジウム

1) コウノトリの絶滅から放鳥に至るまで 佐竹節夫(豊岡市コウノトリ共生部)

2) 身近な野生動物とのつきあい方 須田沖夫(WRV)

3) 展示動物が幸せを感じる時 宮下実(天王寺動物園)

ツバメのタマゴやヒナが消えてしまうわけ

バードリサーチ囑託研究員 神山 和夫

2004年からスタートしたツバメ観察全国ネットワーク (<http://www.tsubame-map.jp>) では、ブログと電子地図を組み合わせた Web 上のデータベースを使いツバメの子育てについての観察記録を蓄積していますが、ツバメについてたくさんの質問も届きます。なかでも多いのがタマゴやヒナが消えてしまったという相談です。

消える現場を目撃しない限り、証拠が残らないので誰が犯人かを言い当てるのは難しいのですが、おおよそ次のようなことが考えられます。

カラスに食べられる

巣が壊されることが多いようです。

早朝に壊されることが多いと聞いたことがあります。

ヘビに食べられる

ヒナやタマゴだけ消えます。

ネコに遊ばれる

巣が飛びつける位置にあると、熱心に飛びつこうとするようです。巣が壊れていれば、カラスかネコの可能性が高いでしょう。

スズメに落とされる

ツバメのヒナやタマゴを落として巣材の藁をたくさん運び込んで自分の巣にしてしまう場合は仕方ない気はしますが、巣を横取りしないで、ヒナだけを落とすこともあります。

タマゴやヒナは巣の真下に落ちますが、人が見つける前にネコやカラスが持って行ってしまいかもしれません。

ペア以外のオスによる子殺し

オスがタマゴやヒナを落として、営巣しているメスとペアになろうとします。この場合も、落とされた卵やヒナが誰かに持って行かれると、いきなりタマゴやヒナが消えたように見えます。



これらのなかで興味深いのは子殺しでしょう。子殺しというのは、配偶者を得られなかったオスが繁殖をしているメスに自分の子供を産ませようとして、そのメスの子供を殺す行動を言います。子供を失ったメスは再び発情し、さらに子育てに失敗したカップルは離婚する確率が高いので、子殺しオスにとっては自分の子供を作る機会が大きくなることから、このような行動が進化したと考えられます。メスが子殺しをする鳥もありますが、ツバメではメスの子殺しは観察されていません。子殺しの頻度は意外に高く、ツバメのコロニー

で行われたある調査では、ヒナの死亡原因の32.1%が子殺しによるものだったそうです。今年のツバメ観察全国ネットワークに寄せられた情報では、子殺し確実と思われる事例が3件ありました。1件は成鳥がヒナをくわえて捨てているのが目撃され、他の2件はヒナが落下して死亡した前後で、ペアの一方が変わっているのが確認されています。

子殺しというとハーレムを乗っ取った雄ライオンによるものが有名ですが、私たちの身近でも起きている野生のドラマなのです。

油汚染水鳥救護指導者講習会の開催

WRV 理事 馬場 国敏

油流出事故などで油まみれになった水鳥の救護活動に取り組んでいる WRV は、7月29日(土)～30日(日)に神奈川県川崎市にある野生動物ボランティアセンターにおいて、油汚染水鳥救護指導者講習会を開催した。同協会に所属し全国各地において油汚染事故の際に第一線で活躍されている獣医師ら13名が参加。日本における油汚染水鳥の救護体制や救護技術の共通化、統一化を図る目的で、油の洗浄方法の確認や実際の救護活動の方法について討論した。

29日に行われた洗浄実習は、二人一組になって、アイガモに付着した油を家庭用洗剤 JOY (P&G) で羽根を傷めないように丁寧に洗い流す手法で行われた。

まず、鳥が入る大きさの桶を用意。鳥の体温と同じ約 40 のお湯を張り、洗剤を入れ 2～3%にする。鳥をお湯の中に沈め、羽根をもみほぐすように洗う。その後お湯をかくように水流を羽根にあてる。すぎは約 40 の温水シャワーで勢いよく羽根にあて、洗浄液を洗い流す。羽根の上に水玉が出来ることを確認して終了した。

30日は救護活動や救護体制の実際について、今年に2月に起きた北海道知床での油汚染の海鳥の大量死体漂着の事例を参考に、環境省の担当者を交えながら、熱心に討論した。

今後、事故が起きた際、NPO を中心とした連絡、連携を蜜に行い、活動拠点の設置から支援体制の強化を図り、日本沿岸のどの地域で事故が起きても迅速に対応できるように、当協会内に「油汚染水鳥救護専門家協議会」を設置して閉会した。

『油汚染水鳥救護専門家協議会』

専門部部長 : 須田沖夫

専門部副部長 : 馬場国敏、野村 治、中津 賞

専門部員 : 戸田昭博、隅田賢峰、斎藤 聡、森田 斌、盛田 徹、新妻勲夫、大窪武彦
安田剛士、皆川康雄、根本 智、箕輪多津男

* 専門部員は随時登録することができる

事務局 : 皆川康雄、齋田栄里奈

問い合わせ先) WRV 事務局 TEL : 042-529-1279 (佐藤)

野生動物ボランティアセンター内

水鳥救護・リハビリテーション TEL : 044-777-8243 (馬場)

(写真) アイガモに重油を付けて洗浄の実習をおこなった。



+ --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- +

寄付ご協力者 (敬称略) 2006.5.15 ~ 2006.8.31

【一般】

6 . 1 4	ふっさ環境フェスティバル会場にて (募金箱)	2 , 5 2 0
2 1	ダクタリ動物病院国立病院 (募金箱)	3 1 , 3 3 6
7 . 2 7	丸野真樹子	7 , 0 0 0
2 9	川崎ボランティアセンター油汚染鳥救護講習会会場にて	4 5 , 0 0 0
8 . 4	姫動物病院 (募金箱)	2 7 , 4 2 2

+ --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- + --- +

事務局日誌 2006.6.24 ~ 2006.9.24

--- 6月---

- 24：神奈川支部総会【神奈川支部】
- 27：水鳥救護研修センターにおける研修について環境省と懇談 出席：馬場、須田
- 27：五十嵐前日本獣医師会会長祝賀会 出席：小松、須田
- 29：三重県北勢中学校3年生が水鳥救護研修センター訪問 対応：齋田

--- 7月---

- 7：環境省マイクロチップ打ち合わせ（日本獣医師会にて） 出席：石橋、須田
- 15：IUCN 河口湖コンサート 出席：須田、新妻
- 19：理事会
- 19：『愛和』取材対応 対応：須田
- 19：神奈川支部会計監査（神奈川支部）
- 23：マイクロチップ講習会（北海道） 講師：石橋、須田
- 25, 26：日本獣医生命科学大学4年生対象油汚染講習会 出席：大窪、馬場、皆川、新妻、野村、森田、須田、梶ヶ谷、箕輪、齋田
- 28：自民党東京政経フォーラム（山加朱美議員） 出席：小松、新妻、須田
- 29：川崎ボランティアセンター油汚染鳥救護講習会（P&G 後援） 中津、斎藤、隅田、戸田らと理事らが参加
- 31：『愛和』発行（取材対応：須田）

--- 8月---

- 3：木村喬先生御逝去
- 15：東京都の野生鳥獣里親制度について東京都環境局自然環境部と懇談（都庁、東京都支部） 出席：森田、新妻
- 16：理事会
- 25：環境省打ち合わせ 出席：馬場、野村、須田

--- 9月---

- 1：ヒナを拾わないでキャンペーン報告会・打ち合わせ
- 3：東京都支部学術講習会 講師：安田、大窪、石橋ら
- 4：環境省入札説明会
- 6：P&G 打ち合わせ 出席：野村
- 8：環境省入札
- 9,10：神奈川支部リハビリレーター講習会
- 12：理事会
- 23：油汚染水鳥救護講習会（東京櫻鳥公園、東京都支部） 出席：新妻、野村、須田、森田、大窪、箕輪、佐藤
- 23：神奈川動物フェスティバル（神奈川支部）

野生動物救護獣医師協会（ホムページ） <http://www.wrvj.org> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 58 2006.9.25 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パルク 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：須田 沖夫 編集文責：森田 斌
